

『枕草子』の「木の花は」段における「桐の木の花」条について

— 李嶠の「桐」詩などの漢籍にかかわって —

李 暁 梅

はじめに

「桐」を日本文学の題材（日本漢詩文を除く）として、はじめて取り上げたのは清少納言である。それ以前、和歌文学には「桐」を詠んだ歌はないし、同時代の藤原公任撰『和漢朗詠集』^(注1)にはただ白居易が詠んだ「桐」の漢詩三首が載っているにすぎない。これを挙げてみると、次の三句である。

209 槐花雨潤ふ新秋の地 桐葉風涼し夜にならんと欲する天 白^{はく}

槐花雨潤新秋地 桐葉風涼欲夜天 白〔文集・佳句〕

309 秋の庭 掃はす藤杖を携へて 閑かに梧桐の黄葉を踏んで行く 白^{はく}

秋庭不掃携藤杖 閑踏梧桐黄葉行 白〔文集・佳句〕

780 春の風に桃李花開く日 秋の露に梧桐葉落つる時 白^{はく}

春風桃李花開日、秋露梧桐葉落時 白〔文集〕

〔早秋〕部の二〇九番は『白氏文集』卷五十五『秘省後廳』詩（二五二九）の前半の二句である。秋雨に濡れて散ってしまった「槐花」と、秋風に吹かれて夜の涼しさを呼ぶ「桐葉」が、初秋の風物として捉えられている。後半の

「盡日後庭無一事。白頭老監枕書眠」があるように、この詩は白氏が残暑の過ぎさつた直後、一息のんびりして、役所の庭の風情を詠んだものである。「落葉」部の三〇九番は卷十三「晚秋閑居」詩（六八四）による。誰一人として訪れる人もない辺鄙の地に閑居する白氏が、散った梧桐の葉が黄色になり、その落ち葉を踏んで散歩する晩秋の庭の風趣をうたった句である。「恋」部の七八〇番は平安びとに愛好された名作『長恨歌』の二句であつて、花が満開の春も、桐の葉が散る秋も、亡き楊貴妃の美しさを思い出し、寂しさをつのらせる玄宗皇帝の心の中をうたった句として人口に膾炙されている。

小林祥次郎氏は、「秋のキリの葉は中国の詩歌で詠んでいた。その影響で、日本人もキリの葉を秋のものとして扱ふようになった。その影響は、まず漢詩文に現れ、和歌にまで及んだのは新古今集のころになつてのことであつたといふことになる」と述べている。「桐」は秋の題材として、くわえてその葉の落ちる風景が一種の象徴とされ、寂しさをいつそう募らせる景物としたのである。

では、清少納言は「桐」をどのように捉えているのであろうか、漢籍に基づいてその捉え方を考えてみたい。

一 「木の花は」段における「桐の木の花」条

類聚的章段「木の花は」では、清少納言は紅梅、桜、藤の花、花橘、梨の花に続けて、桐についてこのように描いている。

桐の木の花、①紫に咲きたるは、なほをかしきに、②葉のひろがりざまぞうたてこちたけれど、こと木どもとひとしう言ふべきにもあらず。③唐土に名つきたる鳥の、選りてこれにのみゐるらむ、いみじう心となり。④

まいて琴に作りて、さまざまなる音の出で来るなどは、をかしなど、世の常に言ふべくやはある。いみじうこそめでたけれ。（記号・波線は筆者。）

（三五段「木の花は」八七頁）

記号で示したように、①紫色の花、②大きい葉、③霊鳥・鳳凰が棲む、④琴の良材という四点の特徴が取り上げられている。桐は紫色の花が咲いてとてもいい感じなのに、葉が大きく広がる様子が違和感があるけれど、他の木々と同じく論じるべきではない。（なぜなら）唐の国では想像上の大鳥——霊鳥「鳳凰」が桐のみ選んで棲むといわれて、特別な感じがする。まして琴に作っているいろいろな音色が出てくるのは、「興深い」などの平凡な言葉で言い表すことができるのであろうか、たいへんすばらしいものである、という。

①と②の部分は作者がまるで桐が目の前にあるように、観察風に描き、感想をも加えている。③と④は、波線部「こと木どもとひとしう言ふべきにもあらず」の一文によって、他の木々が及ばないさらなる桐の特質に展開している。作者は桐に関する蓄積した知識を披露し、想像を「唐土」に走らせている。霊鳥・鳳凰が桐だけを選んで棲むという神話に対して「いみじう心ことなり」と興味を表している。その一方、琴のような一流の楽器の良材で、素晴らしい音色が弾けることに対して、「いみじうこそめでたけれ」と関心を示している。

ところで、この段の主題は「木の花」である。「紅梅」は「濃きも薄きも」美しい、「桜」は「花びら大きに、葉の色濃きが、枝ほそくて咲きたる」「藤の花」は「しなひ長く、色濃く咲きたる、いとめでたし」と、それぞれの花の色や形が描かれている。その次の、「橘の花」「梨の花」について、いきなり文章が長くなったが、花そのものを中心に描く趣旨は変わっていない。

四月のつごもり、五月のついたちのころほひ、橘の葉の濃く青きに、花のいと白う咲きたるが、雨うち降りたるつとめてなどは、世になう心あるさまにをかし。花の中より黄金の玉かと見えて、いみじうあざやかに見えた

るなど、朝露に濡れたるあさばらけの桜におとらず。郭公のよすがとさへ思へばにや、なほさらに言ふべうもあらず。

梨の花、世にすさまじきものにして、近うもてなさず、はかなき文つけなどだにせず。愛敬おくれたる人の顔などを見ては、たとひに言ふも、げに葉の色よりはじめてあはひなく見ゆるを、唐土には限りなき物にて、文にも作る、なほさりともしやあらむと、せめて見れば、花びらの端にをかしきにほひこそ、心もとなうつきためれ。楊貴妃の、帝の御使に会ひて、泣きける顔に似せて、「梨花一枝、春、雨を帯びたり」など言ひたるは、おほろけならじと思ふに、なほいみじうめでたき事は、たぐひあらじとおほえたり。 (三五段「木の花は」八七頁)

「橘」について、花の色、特に雨後のその鮮やかな、可憐な様子が重点的に捉えられている。青い葉に白い花びらが咲き、真中から黄金のような花芯があるかないかのようで、情趣が溢れる。この姿は朝露に濡れているあさばらけの桜の風情に劣らない、という。

「梨の花」についても「花」からの離脱は見えない。(日本では) 梨の花は世の中で興ざめなものとして身近に飾らず、ちゃんとした内容でない手紙につけることもしない。魅力を感じない女の人の顔つきを見て、喩えに引く場合もある。しかし、中国では梨の花はこの上もないものとして、詩文にも詠んでいる。無理にこの花をよくよく観察してみると、花びらの周りに紫の色艶があるかなきかの程度についているようである。あの白楽天の「長恨歌」では、楊貴妃が死後、玄宗の御使いに会った時の感泣した表情を、「梨花一枝、春、雨を帯びたり」というように言い表している。作者は日本と中国における「梨の花」の扱い方が異なったり、自ら実物に近づいてその様態を再確認したり、さらに名作名句を引用したりなどの有力な手法を用いて、比類のない「梨の花」を褒め称えているのである。

比べて、ただ「紫に咲きたるは、なほをかしきに」の一言しか「桐の木の花」に言及しない「桐の木の花」条の捉

え方は特に目立っている。即ち、「花」の美しい様子などよりは、「桐の木」の特質——大鳥が「桐の木」を選んで止まる中国の神話、一流の楽器「琴」が「桐の木」によって作られる事実、眼を向ける作者の姿勢がうかがえる。

どうして清少納言は「花」から「木」への視線の移動、言い換えれば「花」より「木」の性質を重視する、同じ章段のほかの項目に出てこない、「桐」に対する独特な捉え方を用いているのであろうか。まず、先行研究をふまえて、作者の考えを推察してみたい。

二 李嶠の「桐」詩にかかわって

「桐の木の花」条の典故について、矢作武氏は

載為「天子琴」、……花紫葉青々、……為君長「高枝」、鳳凰上頭鳴、一鳴君万歳、寿如「山不傾」。

(白氏文集二、答「桐花」)

毛詩疏曰、鳳非「梧桐」不棲。(初學記三〇、鳥部)

桐是嘉木。鳳凰所棲。爰伐琴瑟。八音克諧。歌以永言。唯々喑々。(芸文類聚八八、木部、郭璞、梧桐贊)

と挙げており、目加田さくを氏は、「唐にことごとしき名付きたる鳥のえりてこれにのみ居るらむいみじう心ことなり」の一文について、

大雅(卷阿)……鳳凰鳴矣于彼高岡梧桐生矣于彼朝陽……鄭玄箋云鳳凰之性非梧桐不棲非竹實不食(現在書目録によれば当時詩経は鄭箋によって読まれたらしいから白虎通(鳳凰)……食常竹實、栖常梧桐)を引く箋に依拠すると思われ、清少は即詩経と想っていたであろう)

と述べている。^(注5)

近年、新聞「美氏は「桐」と長恨歌と桐壺巻——漢文学よりみた源氏物語の誕生」(『甲南大学紀要(文学編)』)で、「桐壺」が出現する理由の一つは元稹の「桐花」、白楽天の「答桐花」にあると説く際に、「枕草子」における「桐の木の花」に関する描き方は元白の詩に通じていると詳しく論じている。引いてみれば、

(前略) これらの元白の詩の表現と「枕草子」三十七段とを比較してみると、「むらさきに咲きたる」と「紫桐」(元)「花簇紫霞英」「花紫」(白)、「葉のひろがりさま」と「葉重碧雲片」「葉青々」(白)、「こと木どもとひとしういふべきにもあらず」と「不競桃杏林」「牡丹還復侵」(元)「山木多翳鬱。茲桐独亭々」「桃李不三敢争」(白)、「こと」としき名つきたる鳥」と「鳳婦丹穴岑」(元)「鳳凰上頭鳴」(白)、「琴に作りて」と「我願裁為」(元)「載為天子琴」(白)、「さまざまなる音のいくる」と「宮」「商」「角」「徵」「羽」(元)の五音、という所に共通性が見られよう。清少納言の「桐」は、元白の「桐」と相通するのである。(傍線は筆者。)

桐花」と照らし合わせて、両者が取り上げている項目が通じ合っているところに論を留めている。しかも、このうち、傍線部の「こと木どもとひとしういふべきにもあらず」と「不競桃杏林」「牡丹還復侵」(元)「山木多翳鬱。茲桐独亭々」「桃李不三敢争」(白)と共通していると挙げている。

しかし、じっくり読んでみれば、この共通点が必ず成立するとは理解し難い部分がある。すなわち、清少納言は「桐」が色の王者「紫」の花を咲かせることを褒め称えている一方、葉が大きくて広がりすぎることには違和感を表している。このとき、逆接を表す「ど」の直後に、「こと木どもとひとしういふべきにもあらず」をもって、他の木々が及ばない「桐の木」の独特な性質に注目しようとしている。作者の関心事は次に挙げた鳳凰が桐にしか棲まないことと桐を

琴に作ることに二点である。このようにみれば、この「こと木どもとひとしういふべきにもあらず」は、その一文自身がもっている意味というより、文章の流れのなかで、桐の木の特質、作者の関心事を導く、文章の前半と後半を繋ぐパイプ役がメーンになっていると思われる。

その一方、「不競桃杏林」「牡丹還復侵」(元)「山木多翳鬱。茲桐独亭々」「桃李不三敢争」(白)が詩文の中でどのように用いられているのであろうか。

桐花

元稹

臘月上山館	紫桐垂好陰	可憐暗澹色	無人知此心	舜沒蒼梧野	鳳婦丹穴岑	遺落在人世	光華那復深
年々怨春意	不競桃杏林	唯占清明後	牡丹還復侵	況此空館閑	云誰恣幽尋	徒煩鳥噪集	不語山嵌岑
滿院青苔地	一樹蓮花簪	自開還自落	暗芳終暗沈	爾生不得所	我願裁為琴	安置君王側	調和元首音
安問宮徵角	先辨雅鄭淫	宮絃春以君	君若春日臨	商絃靡以臣	臣作旱天霖	人安角聲暢	人因闕不任
羽以類万物	妖物神不飲	徵以節百事	奉事罔不欽	五者苟不亂	天命乃可忱	(後略)	(後略)

答桐花

白楽天

山木多翳鬱	茲桐独亭々	葉重碧雲片	花簇紫霞英	是時三月天	春暖山雨晴	夜色向月淺	暗香隨風輕
行者多商賈	居者悉黎民	無人解賞愛	有客独屏營	手攀花枝立	足躡花影行	生憐不得所	死欲揚其聲
載為天子琴	刻作古人形	云待我成器	鷹之於穆清	誠是君子心	恐非草木情	胡為愛其華	而反傷其生
老龜被刳腸	不如此無神靈	雄雞自斷尾	不願為犧牲	況此好顏色	花紫葉青青	宜遂天地性	忍加刀斧刑
我思五丁力	拔入九重城	當君正殿栽	花葉生光晶	上對月中桂	下覆階前葉	汎私香爐煙	隱映斧藻屏
為君布綠陰	當暑蔭軒楹	沈沈綠滿地	桃李不敢爭	為君發清韻	風來如叩瓊	冷冷聲滿耳	鄭衛不足聽

受君封植力 不獨吐芳馨 助君行春令 開花應清明 受君雨露恩 不獨含芳榮 戒君無戲言 剪葉封弟兄
 受君歲月功 不獨資生成 為君長高枝 鳳凰上頭鳴 一鳴君萬歲 壽如山不傾 再鳴萬人泰 泰階為之遷
 如何有此用 幽滞在嚴祠 歲月不爾駐 孤芳坐凋零 請向桐枝上 為余題姓名 待余有勢力 移爾猷 丹
 元稹は自分自身を「桐」に喩え、陽春三月や清明の後、満開の「桃杏」「牡丹」などと競えず、時に恵まれない不遇の身を訴えている。この「不競桃杏林」「牡丹還復侵」は、むしろ「こと木どもとひとしいふべきにもあらず」とまったく逆の意を詠んでいると思われる。白楽天は不遇に置かれた「桐」の姿と、もし自分が勢力を得たら「桐」を宮中に移し植えて、「桃李」などと比べられない繁茂した姿に成長させたい、の意をうたって、元稹の苦悶を理解しようとしている。「山木多翳鬱、茲桐獨亭亭」は「当君正殿栽、花葉生光晶」と対比になっている、山奥に衆林から離れている「桐」の孤独な様子を描いていると読み取れる。

もちろん、清少納言の「桐」に対しての認識は元白の「桐花」「答桐花」による可能性があることを否定していない。しかし、これは描写の唯一の源泉ではない。ここで、嵯峨朝に既に日本に入ってきた、貴族の家庭教育における啓蒙の教科書として使われていた「李巨山詠物詩」(「李嶠百二十詠」ともいう)に注目し、そのうちの「桐」詩を引いてみたい。

孤秀嶠陽岑 亭々出衆林 孤子嶠陽の岑に秀でて 亭々として衆林より出でたり
 春光襍鳳影 秋月弄圭陰 春の光に 鳳の影を襍り 秋の月に 圭の陰を弄ぶ
 高映龍門廻 雙依玉井深 高く龍門に映りて廻かに 玉井に雙依して深きに
 不因將入爨 誰為作鳴琴 將に爨に入らむとするに因らずば 誰か為に鳴琴を作らむ

「桐」は嶠陽山に特有の植物としてその秀麗、繁茂した姿が目立っていて、衆林を論じる比ではない。傍線部「亭々出衆林」をもって、他の木々をして比肩できない桐の特質が次に挙がってくる。すなわち、①鳳凰がこの木に棲み、

春光にその五彩が交じって耀く。②葉が圭の形をして秋月の光に揺れ動く。③梢が高く龍門に届き、④根つ子はこれまた極めて長く、井底の奥深いところまで延びる。⑤貴重な材質を用いて、貴人のために最高の楽器・琴を作る、の五つの点である。第二句「亭々出衆林」は清少納言が捉えた「こと木どもとひとしい言ふべきにもあらず」に通じ合って、つまり、後の文章——衆林よりはるかに立派に成長している「桐」の性質を挙げるために、大きな役割を果たしていると思われる。

「桐」の性質について、鳳凰がそれに棲むこと、琴に作ることの二点のほか、李嶠の「桐」詩では、葉の形や、伸び伸びとする枝と根つ子のことを取り上げており、白楽天の「答桐花」では葉の色、花の形・色、香などを取り上げている。比べて、「木の花は」の主題に即して「紫色の花」や「大きな葉」を捉えながら、桐の木の性質を特に強調する清少納言の捉え方は際立っている。どうして、彼女はこの二点に拘らなければならないのか。次に、「鳳凰が桐に棲むこと」「桐を琴に作ること」について考察を深めたい。

三 鳳凰が桐に棲むことについて

先ず、鳳凰は一体どのような鳥かについて、今までの先行研究では触れられていない漢籍資料をも用いて調べることにする。

鳳凰は四靈「麒麟・鳳凰・龍・亀」のうちのひとつとして天下太平の聖天子の世に現れる、という神話上の鳥で、雄を鳳、雌を凰という。「尚書」では伝説上の聖天子・堯舜の時に鳳凰が現れた、と記している。

(前略) 夔曰。戛擊鳴球。搏拊琴瑟。以詠祖考來格。虞賓在位羣后德讓。下管鼗鼓。合止祝敔。笙鏞以聞。

鳥獸踴躍。簫韶九成。鳳皇來儀。

〔尚書〕（卷第二）虞書 益稷

鳳凰が太平の聖世を遂げた賢明な君主・舜帝の樂の音に感じて、舞い降りてきたのである。この点について、後の『抱朴子外篇 卷二』「臣節第六」でも、堯舜が始めて大功を建てた太平の世の様子について、

抱朴子曰、昔在唐・虞、稽古欽明、猶俟群后之翼、亮用臻巍巍之成功、故能熙帝之載、庶績其凝、四門穆穆、百揆時序、蠻夷無滑夏之變。阿閼有鳴鳳之巢也。（後略）

と描かれている。聡明な帝はなすべき行いを完成し、政治の実績を挙げる。賓客は恭しく四方の門に至り、百官の仕事が整然と行われる。蠻族が中国に侵入する恐れもない。この太平の世に應じて、仰ぎ鳴く鳳凰は御所の高殿に巢を作るのであった、という。

その形態・生態に関して、『説文解字』における「鳳」字の解釈によれば、

鳳、神鳥也、天老曰、鳳之像也、慶前、鹿後、蛇頸、魚尾、龍文、龜背、燕頤、鵝喙、五色備舉、出於東方君子之國、輶翔四海之外、過崑崙、飲砥柱、濯羽弱水、暮宿丹穴、見則天下安寧、（後略）

〔印景文淵四庫全書〕經部二七小學223—142上段

とある。すなわち、鳳は神鳥である。前から見れば麒麟に似て、後ろから見れば鹿に似る。蛇のような首、魚のような尾、龍のような文様、亀のような背中、燕のような顎、鵝のような嘴、つまり、「八像」がその一体に揃っている。また、五色が揃っている。東にある君子の国を出て、四方の海を飛び廻り、崑崙山を飛び越える。砥柱山の泉を飲み、弱水で羽を洗う。夜は丹穴山で宿りをして、現れると天下泰平・安寧であることを意味する。

「五色」は青、白、赤、黒、黄の五つの色で、「仁」「義」「禮」「智」（または「徳」「信」の五つの「徳」が表され

ている。これについて、『山海經』には次のように見られる。

又東五百里、曰丹穴之山、其上多金玉、丹水出焉、而南流注于渤海。有鳥焉。其状如鵝、五采而文。

名曰鳳凰。首文曰徳、翼文曰義、背文曰禮、膺文曰仁、腹文曰信。是鳥也、飲食自然、自歌自舞、見則天下安寧。（記号は筆者。）

〔印景文淵四庫全書〕子部三四八小説家類1042—7下段

詩人・郭璞は『鳳凰賛』で鳳凰の「八像」と「五徳」を取り上げている。

鳳凰靈鳥 実冠羽群 鳳凰は 靈鳥 実に羽群に冠たり

八像其體 五徳其文 其の體に八つの像とし 其の文に五徳とす

附翼來儀 應我聖君 翼を附して來儀し 我が聖君に應ず

靈鳥・鳳凰が華麗な姿で、他のあらゆる鳥にまさっている。八種類の動物の像が一身にそろい、五徳が文様に移る。軽快に舞い降りて、聖明の君主に應じている。詩人は鳳凰の到来とその美しい姿を描くことを通して、君主が聖明であることを賛美しているのである。

その反面、鳳凰が来なければ、聖王明君が出ないことをも意味する。孔子は『論語』で、

子曰、鳳鳥不至、河不出圖。吾已矣夫。

〔子罕第九〕

といい、聖人の現れる瑞兆である鳳凰が来ないことに対して絶望の意を表している。

そして、鳳凰が桐にしか棲まないことについて、『莊子』外篇・第十七・秋水篇では、

夫鵠鵠（鳳凰の一種）発於南海、而飛於北海。非梧桐不_レ止。非練實不_レ食。非醴泉不_レ飲。

とあり、鳳凰は南海から飛び立ち、北海に飛び渡る。梧桐でなければ留まらない、不潔なものを食べない。即ち、竹の実でなければ他に物を食わない、甘泉以外は水を飲まないものである。

【毛詩】大雅・生民之什・卷阿では、高い丘に高らかに歌う鳳凰と、そこに朝のひらめき輝く陽射しの中、生い茂っている梧桐の様子をうたっている。

鳳皇鳴矣 于彼高岡

鳳皇 鳴きぬ 彼の高岡に

梧桐生矣 于彼朝陽

梧桐 生ず 彼の朝陽に

華華萋萋 離離喈喈

華華 萋萋たり 離離 喈喈たり

白川静氏の解釈によれば、「華華萋萋」は梧桐の盛んに茂る枝葉をいい、「離離喈喈」は鳳凰が和らぎ鳴く声をいう、としている。古注には、

梧桐盛也。鳳皇鳴也。臣竭其力。則地極其化。天下和洽。則鳳皇樂德。(毛伝)

華華萋萋。喻君德盛也。離離喈喈。喻民臣和協。(鄭箋)

とあり、「華華萋萋」と繁茂する「梧桐」の葉は君徳の盛んなさまの喩えであり、「離離喈喈」は民臣和協して、徳を楽しむ様子の喩えであるという。梧桐の上で鳳凰が歌っている内容について、明記してくれたのは、先に述べた白樂天の「答桐花」である。

為君長高枝 鳳凰上頭鳴

君が為に 高枝を長じ 鳳凰 上頭に鳴かん

一鳴君万歳 寿如山不傾

一たび鳴けば 君 万歳 寿は 山の傾かざるが如く

再鳴万人泰 泰階為之平

再び鳴けば 万人泰に 泰階 之が為に平ならん

まず歌ったのは君主が千秋万歳であることで、次に歌ったのは民衆が安定、泰平であることである。

このように、道徳のあるイメージを託し、太平の聖世を象徴する鳳凰は桐だけを選び、その樹上で歌ったり、舞ったりする。このことは他の木々には言及はなく、心霊の備わる格の高い「桐の木」の独特な一面である。清少納言は

「靈鳥・鳳凰が棲むこと」を通して、「桐の木」が鳳凰を魅了し、瑞祥の靈力を備える、華麗かつ繁茂の植物であることを描こうとしていると思われる。

四 桐を琴に作ることにについて

その昔から、桐の木は琴の良材である。この知識を記した和漢の文献には枚挙にいとまがないほどである。代表的な資料を挙げれば、古く『毛詩』国風・邶風・定之方中では「樹之榛栗 椅桐梓漆 爰伐琴瑟」の記述があつて、桐は琴を作るために、宮室の位置を定めた後、椅、梓、漆と共にこれを植えるものと詠っている。

嵇康は『琴賦』で

惟椅梧之所生兮、託峻嶽之崇岡。披重壤以誕載兮、參辰極而高驤。含天地之醇和兮、吸日月之休光。鬱粉紵以獨茂兮、飛英蕤於昊蒼。夕納景于虞淵兮、旦晞幹於九陽。經千載以待價兮、寂神跡而永康。(後略)(文選)

と記して、琴が妙音を発する理由は、その材料となる椅梧が険しい山の高い丘に生えており、天地の醇和の気、日月のよい光明を吸収し、鬱蒼としていつまでも安らかに繁榮しているからである、という。

『万葉集』(八〇九番)には、七二九年(天平一)に大伴旅人が藤原房前に対馬産の梧桐でつくらせた日本琴を贈ったとの記載がある。

余、根を遥島の崇巒に託せ、幹を九陽の休光に晞す。長く煙霞を帯びて、山川の阿に逍遙す、遠く風波を望み、雁木の間に出入す

などは、『琴賦』を念頭においての叙述であらう。

『二十卷本倭名類聚抄』『大和本草』などの文献にも、「桐」を用いて琴に作る記事が見られる。

梧桐 陶隱居本草注云。桐有四種。梧桐音同。梧桐上音吾。崗桐。椅桐椅音椅、和名皆木里。梧桐者色白有子者今案、俗訛呼為青桐是也、二音讀土。椅桐者白桐也。三月花紫。亦堪作琴瑟者是也。(二十卷本倭名類聚抄、卷二十)

梧桐 ……、中華二梧桐ヲ以テ琴瑟二作り器材トス、上材ナリ、今島桐トテ世上ニ良材トス、器二作りテ白桐ニマサレリ、四國ヨリ出ツ、或隱岐ヨリ多出ツ、故ニシマキリト云、一説ニ初磯嶽ノ島ヨリ出、故ニ名クト云：

(『大和本草』十一卷園木)

清少納言も度々琴に関する話題を取り上げている。

「清涼殿の丑寅の隅の」段では、小一条左大臣師尹が後に村上天皇の宣耀殿の女御になった娘・芳子に教えた言葉を記している。「一つには、御手をならひたまへ。次には、琴の御ことを、人よりことに弾きまさらむとおぼせ。さては古今の歌二十卷をみな浮かべさせたまふを御学問にはせさせたまへ」(五八頁)。後世に賞賛された父小一条左大臣師尹の教訓の言葉ではあるが、琴を弾くことは貴族の女性たちにとって、身につけなければならぬ教養の一つであることが伝えられている。

琴の靈妙さを描く『宇津保物語』の人物、仲忠と涼の優劣について、ある女房が「仲忠 童生ひのあやしさを」と中宮定子の御言葉を繰り返して言ったことに対して、清少納言は「何か、琴なども天人の降るばかり弾き出で、いとわるき人なり。帝の御むすめやはえ得たる」(七九段「返る年の二月二十余日」一四四頁)と、帝の御女を得たことを根拠にして、仲忠のほうが優れていると反論している。

中宮の弟隆円は琴を持っていた。しかし、姉の淑景舎に父の遺品である笙の笛と自分の琴との交換を望み、「それは、

隆円に賜へ。おのがもとに、めでたき琴はべり。それに替えさせたまへ」(八九段「無名といふ琵琶」一七六頁)と懇願した話題も取り上げられている。

また、一本一の類聚的章段「夜まさりするもの」には「琴の声」が出てくる。「濃き掻練のつや。むしろたる綿。女は、額はれたるが髪はうはしき。琴の声。かたちわるき人のけはひよき。郭公。滝の音。」(一本一・二五五頁)。琴は身近な事物、人々の生活様式、自然風物などの中間に位置し、これらと融合して、平安王朝の夜のみやびな生活情景が再現されているのである。

このように、琴は貴重な楽器でありながら、清少納言にとつては極めて身近なものである。「さまざまなる音の出で来るなどは、をかしなど」の描写は、ただ琴の妙音を描く『宇津保物語』などを念頭においての記述というより、実物に触った、生の耳でその音色を確かめた風が濃厚に伝わっている。なぜなら、この実生活に密着する視点から、桐を親しもうとする捉え方は、「花の木ならぬは」(三十八段)における「木々」に通じ合っていると思われるからである。

例えば、「榊」について、「臨時の祭の、御神楽のをりなど、いとをかし。世に木どもこそあれ、神の御前の物と生ひはじめけむも、とりわきてをかし」といい、「榎の木」について、「またけ近からぬ物なれど、「みつばよつばの殿づくり」もをかし」と言っている。さらに挙げると、「白檜」について、「三位二位のうへの衣染むるをりばかりこそ」、「譲り葉」について、「師走のつごもりのみ、時めきて、亡き人の食物に敷くものにやと、あはれなるに、また齢を延ぶる齒固めの具にももてつかひためるは」などがある。

身近にあるものにかかわって、「桐」の価値を普遍的に発見していく。これこそ清少納言が琴に作る「桐の木」の特質を捉えたわけであらう。

おわりに

清少納言は類聚的章段「木の花は」における「桐の木の花」について、紫色の花を咲かせること、葉の大きいこと、鳳凰は桐の木だけを選んで棲むこと、楽器の第一・琴の良材であること、の四点を捉えている。このうち、「花」に関する描写はただ「紫に咲きたるは、なほをかしきに」の一言だけで、葉に対して違和感を表した後、もっぱら「桐」の「木」としての特質についての記述である。この捉え方は、「木の花は」段に出ている他の項目、「梅」「桜」「藤の花」「橘」「梨の花」などについて、花の色、開花の様子、葉の色だけを描くのと違って、「桐」の「木」としての材質に注視する作者のねらいが伺える。

このねらいは「こと木どもとひとしう言ふべきにもあらず」によって展開されている。他の木々と比肩できない「桐」は、霊鳥・鳳凰の唯一の棲む場所であり、最高の楽器・琴の他ならぬ材料であることが挙げられている。このような文章の展開は、詠物詩人李峯が「桐」詩での「亭々出衆林」を以って桐の特徴を一つ一つ詠んでいくのと相通じていると思われる。

しかし、清少納言は葉の形や、枝、根つ子の長さなど桐の繁茂する姿に直接に言及せず、道德の象徴、太平の聖世を表す霊鳥・鳳凰が桐だけを選んで棲むことを取り上げ、瑞祥の霊力を備える「桐の木」の格調の高いイメージを築いている。それに対応して、目線を身近にある存在・琴の材料であることに移し、「花の木ならぬは」段に出ている「榊」「檜の木」「白檜」などに通じる実生活にかかわる視点から、「桐」の価値を普遍的に見ようとしている。外観・材質とも幅の広いこの「桐」ではあるが、一方は、中国の古典における神話の世界でその格の高さを発見し、他方は、

平安王朝における実生活にかかわり、身近にあるものとして材質の価値を再認識しているのである。

注

- (1) 管野禮行校注・訳『新日本古典文学全集19 和漢朗詠集』(小学館 一九九九年一〇月)
- (2) 小林祥次郎「桐——季語を遡る」『東京成徳国文』一九九五年三月 卷十八
- (3) 本文の引文は『新編日本古典文学全集18 枕草子』(小学館)による。頁を示す。以下同じ。
- (4) 矢作武「枕草子の源泉——中国文学」『枕草子講座4 言語・源泉・影響・研究』有精堂編集部 昭和五一年三月
- (5) 目加田さくを「清少納言の漢才」『日本文学研究資料叢書 枕草子』有精堂 昭和四五年七月
- (6) 新聞一美「桐と長恨歌と桐壺巻——漢文学より見た源氏物語の誕生」『甲南大学紀要(文学編)』一九八三年三月 四八卷
- (7) 元積著「元氏長慶集」(文淵閣四庫全書 別集1079—351)。または『唐詩類苑(二)』(汲古書院)の三五三頁にも見られる。
- (8) 佐久 節訳「白楽天全詩集」第一巻、一八九頁。
- (9) 長澤規矩也編『和刻本漢詩集成 第一輯「李巨山詠物詩」』七六頁。
- (10) 星野恆校訂『漢文大系 第十二巻 毛詩 尚書』(富山房 明治四十四年十二月)
- (11) 中島敏夫解題『古詩類苑(二)』(汲古書院 平成三年十二月) 五一—四頁。
- (12) 吉田賢抗著『新釈漢文大系 第一巻 論語』(明治書院 昭和三五年五月) 一九七頁。
- (13) 市川安司、遠藤哲夫著『新釈漢文大系第8巻 莊子(下)』(明治書院 一九六七年三月) 四八五頁。
- (14) 白川静訳注『詩経雅頌2 (全2巻)』(平凡社 一九九八年七月) 一〇六頁。
- (15) 小尾郊一著『文選(文章編)二』(全釈漢文大系 第二十七巻) (集英社 昭和四十九年九月) 三九九頁。

なお、漢詩文の訓み方について、広島大学名誉教授・藤原尚先生にご教示いただいたことを記して、心より厚くお礼申し上げます。